

# 看護を基盤とした養護教諭養成における養護実践力育成の検討 －現職養護教諭からみた学校インターンシップにおける課題の検討－

佐久間 浩美

了徳寺大学・教養部

## 要旨

本研究では、養護教諭養成課程における学校インターンシップの課題を実習指導者である現職養護教諭の聞き取り調査から分析し、課題を明らかにすることを目的とした。その結果、実習を受け入れた全ての現職養護教諭から、学校インターンシップは一人職種である養護教諭にとって有用であることが示された。そして学生が将来自立して養護教諭の職務を果たせるように実習内容や指導方法を工夫していることが明らかになった。しかし、大学側の学生への事前指導の不足や実習校との連携の不備などの課題が示され、実習指導者である現職養護教諭と大学教員が情報を共有し、連携を深めることが学校インターンシップを行う上で重要であることが明らかとなった。

キーワード：学校インターンシップ，養護教諭，学校

## Consideration of nursing practical skills development based on nursing in nursing teacher training institutions -Examination of issues in school internships from the perspective of an incumbent school nurse-

Hiromi Sakuma

Faculty of Liberal Arts, Ryotokuji University

## Abstract

The purpose of this study was to analyze the problems of school internships in the school nurse training course from the interview survey of the in-service teachers who are the training instructors, and to clarify the problems. As a result, all the in-service teachers who accepted the training showed that the school internship is useful for the one-person school nurse. Then, it became clear that the trainees are devising the training contents and teaching methods so that they can independently fulfill the duties of the nursery teacher in the future. However, problems such as lack of prior guidance to students on the university side and inadequate cooperation with the training school were shown, and it is possible for the internship instructor who is the training instructor and the university teacher to share information and deepen the cooperation. It became clear that it is important for conducting internships.

Keywords: School internships, school nurse, school

## I. はじめに

平成27年12月に示された中央教育審議会「これからの学校を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」<sup>1)</sup>において学校インターンシップの必要性が強調され、教員養成段階での学校現場での実習の必要性が示された。学校インターンシップや学校

ボランティアの取組は、学生が長期間にわたり継続的に学校現場で体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である。また、学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握するための機会として有意義である<sup>1)</sup>と示されている。さらに、学校インターンシップについては、各学校種の教職課程の実情を踏まえ、各教職課程で一律に義務化するのではなく、各大学の判断により教職課程に位置付けられることとする。このため、教育実習の一部に学校インターンシップを充ててもよいこととするとともに、大学独自の科目として設定することも引き続き可能とするなどの方向で制度の具体化を引き続き検討すること<sup>1)</sup>となった。また、学校インターンシップの内容は、学校における教育活動や学校行事、部活動、学校事務などの学校における活動全般について、支援や補助業務を行うことが中心であり、教育実習のように、学校の教育活動について実際に教員としての職務の一部を実践させることは異なることが示されている。インターンシップの受け入れ学校の役割も学生が行う支援、補助業務の指示であり、教育実習のように、学生に対する指導や評価は実施しない<sup>1)</sup>とされている。

本学の看護学科には養護教諭一種免許状を取得できる養護教諭課程がある。多くの看護大学での養護教諭養成課程と同様に、本学においても養護の科目を殆ど看護学科の必修科目に置き換えており、看護師国家資格取得のための実習や学修に時間が費やされ養護教諭としての実践的な学びが不足していた。そのため以前は、教育現場での経験がないまま4年次前期に養護実習に臨み、養護教諭の職務の理解不足や教職員や児童・生徒とのコミュニケーションが上手く図れないなどの課題があった<sup>2)</sup>。そこで、本学の教職課程では、A市教育委員会と提携し平成28年度より48時間の学校インターンシップ（以後は、科目名である教職インターンシップと示す）を施行することとなった。本学では教職インターンシップを「大学独自に設定する科目」に位置付け、その内容から「養護実習指導」「養護実習ⅠⅡ」「教職実践演習」と並んで「教育実習系」の授業の一部とし、学生を実習生と示している。そして対象を看護学科・養護教諭課程の2年生にした<sup>3)</sup>。教職インターンシップは、平成28年度11名（3年生も含む）の参加から始まり、平成29年度19名、平成30年度20名、令和元年度15名、令和2年度9名、累計74名がすでにインターンシップを終え、A市小中学校との連携体制は定着しつつある。

教職インターンシップでの学生の学びと課題については、平成28年にインターンシップ活動報告書の自由記述により分析し報告している<sup>4)</sup>。学生は実際の教育現場で教育活動や養護教諭が行う養護活動を経験し、学校教育とは何か、教員とはどうあるべきか、養護教諭の役割とは何か、自分の課題はなんであるのかを考える機会となり、養護教諭になりたい気持ちを再確認し大学での学びを深めていきたいとの決意が高まっていた。一方、令和元年に実施した教職インターンシップ受け入れ先の学校管理職に対しての意識調査<sup>5)</sup>では、全ての管理職が教職インターンシップの有用性を認めているが、実施に関しては受け入れ先である実習校の負担とならないような実施方法・内容を考えてほしいとの要望が多く見られた。教職インターンシップは多くの学校で4月から実施するため、指導者である養護教諭が最も多忙な時期に重なり、実習生を受け持つことが負担になることが考えられる。今後、教育現場、学生、大学にとってより良い教職インターンシップとするためには、インターンシップの意義や課題を、実際に実習生を指導した現職養護教諭（以後は、実習指導養護教諭と示す）の意識から明らかにすることが必要である。

そこで、本研究では、教職インターンシップを受け持つ実習指導養護教諭の意識を分析し、教職インターンシップの課題を明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 研究協力者及び調査時期

研究協力者は、平成30年度A市小学校中学校15校で実施した教職インターンシップにおいて2年生20名の実習を指導した実習指導養護教諭15名である。教職インターンシップ実施は、平成30年4月から9月であり、データ収集期間は、教職インターンシップ実施終了後の9月から10月までである。教職インターンシップの開始と終了後には、大学実習担当者が実習生を伴い実習校に挨拶に伺っている。

### 2. 調査方法と質問項目

調査方法は、半構造化面接法による聞き取り調査を行い、ICレコーダに録音した。質問項目は、①教職インターンシップの有用性、②指導した手立てで有効なこと、③実習生の養護教諭の職務理解、④実習生の良かった点、⑤実習生の課題、⑥大学に対する要望とした。得られたデータをコード化し、サブカテゴリー、カテゴリーへと抽象化し分類した。以後、文中のコードは「」, サブカテゴリーは「[]」, カテゴリーは「【】」と示す。

## Ⅲ. 倫理的配慮

研究にあたっては、A市教育委員会および校長会で研究の趣旨を、文書および口頭にて説明し同意を得た。調査当日には、研究協力者に研究の趣旨を説明しICレコーダに録音された内容はデータ化し、学校名、個人名は消去し公表しないことを保障し文書で同意を得た。なお、本研究は、了徳寺大学生命倫理委員会（承認番号30003号）の承認を得て行われた。

## Ⅳ. 結果

### 1. 実習生にとっての教職インターンシップの有用性

教職インターンシップの有用性については、15名の実習指導養護教諭すべてから有用であるとの回答を得た。カテゴリーとしては、【学校イメージの確立】【養護教諭の職務理解】【養護教諭としての適性判断】【養護教諭の補助的役割】の4つが抽出された。「2年生の早い時期に行うため今後の大学の講義において学校現場をイメージしながら学修ができる」など〔学校現場のイメージを持つ〕ことや、「児童生徒の学習や運動の様子などの実態が把握でき、学校がどのように動いているのかが実感できる」など〔児童、生徒の理解〕が得られること、「教員としての言葉づかい、挨拶の仕方、職員室の入り方などが体験できる」など〔教員としての心構えの修得〕ができることが、【学校イメージの確立】に役立つと考えられていた。また、「養護教諭の仕事の多さに気づくことができる」など〔養護教諭の職務の理解〕や「自分自身（実習指導養護教諭）の体験から、養護実習ってなんだか分からないうちに終わってしまったので、学校の雰囲気を知る上で（インターンシップは）良い」など〔養護実習前での経験の良さ〕、「養護教諭は一人職種なので、卒業後すぐに養護教諭になる場合不安が多い。インターンシップで健康診断を一通り経験できるのは良い」など〔一人職種ゆえの必要性〕があることから【養護教諭の職務理解】に役立つと考えられていた。また「4年生の養護実習とは違い長い時間で体験するので、自分の適性を見つめる時間が長い」など〔適正さを見つける時間確保〕に繋がり【養護教諭としての適性判断】に生かせることも示されていた。さらに「保健行事が多く、健康診断の事前、事後など補助的な役割をしてもらい助かる」「保健師実習や養護実習だこちらが指導するので負担だが、インターンシップだと手伝いに来てもらっている感覚なので助かる」など【養護教諭の補助的役割】としての有用性が認められていた。概ね、一人職種の養護教諭にとって教職

インターンシップは、学校の様子や養護教諭の実務が実践的に理解できること、特に健康診断などの補助の実習は、将来役に立つ貴重な経験になることや、実習指導養護教諭の業務の補助として役立つと捉えられていた（表1）。

表1. インターンシップの有用性

| カテゴリー      | サブカテゴリー      | コード  |
|------------|--------------|--|
| 学校イメージの確立  | 学校現場のイメージを持つ | 2年生の早い時期に行うため今後の大学の講義において学校現場をイメージしながら学修ができる   |
|            | 児童、生徒の理解     | 児童、生徒の学習や運動の様子などの実態が把握でき、学校がどのように動いていくのが実感できる  |
|            | 教員としての心構えの修得 | 教員としての言葉づかい、挨拶の仕方、職員室の入り方などが体験できる  |
| 養護教諭の職務理解  | 養護教諭の職務の理解   | 養護教諭の仕事の多さに、気づくことができる<br>身体計測の時に名前を確認しながら行うなど、教科書に載っていない細やかな配慮を学べる   |
|            | 養護実習前での経験の良さ | 自分自身の体験から、養護実習ってなんだか分からない内に終わってしまったため、学校の雰囲気味わう上で良い<br>自分が養護実習を行った時に、途中でやめた友達もいたので、いきなり実習に行くよりも前もって知ることができて良い                        |
|            | 一人職種ゆえの必要性   | 養護教諭は一人職種なので、卒業後すぐに養護教諭になる場合不安が多い。インターンシップで健康診断を一通り経験できるのは良い<br>自分が養護教諭として働いた際に、他の先生方のやり方がわからず不安だった。インターンシップがあれば、いろいろな先生方の対応も見れるので良い |
|            | 養護教諭としての適性判断 | 適性を見つめる時間確保<br>4年生の養護実習と違い長い時間で体験するため、自分の適性を見つめる時間が長くなる  |
| 養護教諭の補助的役割 | 養護教諭の補助的な役割  | 保健行事が多く、健康診断の事前、事後、など補助的な役割をしてもらい助かる<br>保健師実習や養護実習だとこちらが指導するので負担だが、インターンシップだと手伝いに来てもらっている感覚なので助かる                                    |

## 2. 教職インターンシップの実習指導において有効な方法

教職インターンシップの実習指導において、実習指導養護教諭が有効な手立てとして挙げたものについて、【自主性の尊重】【受け入れ準備】【指導する際の配慮】【将来に役立つ内容】【次年度への活用】の5つが抽出された。「毎回、実習を始める前に、どのような目的で実習に来ているのか、何をしたいのかを確認した」など〔目的の明確化〕や「保健行事表を見せインターンシップの計画を学生に立てさせた」など〔主体的な計画立案〕により、【自主性の尊重】を心がけていた。そして、【受け入れ準備】として、「インターンシップの学生用に健康診断の内容が分かりやすいようにすべての文書が入っている資料を事前に作成した」など〔指導用資料の作成〕、「健康診断結果のパソコンの打ち込みや治療勧告書の作成など、当日やってもらいたいことを予め用意しておく」など〔実習内容の用意〕を事前に行う、「健康診断補助では、実施要項や準備一覧表など教職員に渡す資料を学生にも事前に渡した。イメージがわからない点は説明した」など〔事前の内容提示〕を行っていた。さらに、【指導する際の配慮】として「1日の実習内容をプリントで確認し、突発的な事故やけがで養護教諭が不在になっても実習が中断しないようにした」など〔実習始まりの内容確認〕、「健康観察の結果や集計などをしながら、休みが続いている子どものことやクラスなど注意して見るべき留意点を説明している」など〔目的や留意点の提示〕、「特別支援学級への授業見学では、先生方がどのような配慮をしているのかを見てくるように伝え計画的に実施していることを理解させた」など〔見学する視点を例示〕、「トイレの見回りや（トイレトペーパー、石鹸などの）補充を行う目的を示し、ただやるのではなく衛生状態を確認する大事な仕事であることを伝えている」など〔実習の意味を伝える〕、「児童との関わりを多く持ってもらうと思い、給食や清掃活動などは学級に入ってもらった」など〔児童生徒との関わり〕を多く持たせるなど、仕事の目的や意義などを理解させること、実際に児童生徒との関わりの中で学ばせることなどの配慮がなされていた。さらに、「将来養護教諭になった時、一人で健康診断をすすめなければならないので健康診断などを多く実習してもらった」など〔一人職種ゆえの実習経

験] や、「将来、保健指導ができるよう他教科の先生の授業を見させアドバイスをもらい自分で考えた保健指導をホームルームで実施させた」など〔保健指導の経験〕をさせるなど、【将来に役立つ内容】を意識した実習を用意していたことも示された。実習生への対応以外では、実習指導養護教諭が学校を異動しても教職インターンシップの実習を引き継げるよう「インターンシップの学生の記録をとっており、他県から来た養護教諭にもインターンシップの内容が分かるよう資料を残している」など〔インターンシップの実習を次年度に生かす〕など【次年度への活用】も有用な手立てとして述べられた（表2）。

表2. インターンシップを行う有効な手立て

| カテゴリー    | サブカテゴリー             | コード  |
|----------|---------------------|--|
| 自主性の尊重   | 目的の明確化              | 毎回、実習を始める前にどのような目的で実習に来ているのか、何をしたいのかを確認した                        |
|          | 主体的な計画立案            | 保健行事表を見せインターンシップの計画を学生に立てさせた                                     |
|          | 指導用資料の作成            | インターンシップの学生用に、健康診断の内容が分かるようすべての文書が入っている資料を事前に作成した                |
| 受け入れ準備   | 実習内容の用意             | 健康診断結果のパソコンへの打ち込みや治療動告書の作成など、当日やってもらいたいことを予め用意しておく               |
|          | 事前の内容提示             | 健康診断補助では、実施要項や準備一覧表など教職員に渡す資料を学生にも事前に渡した。イメージがわからない点は説明した        |
|          | 実習始まりの内容確認          | 一日の実習の内容をプリントで確認し、突発的な事故やけがで養護教諭が不在になっても実習が中断しないようにした            |
| 指導する際の配慮 | 目的や留意点の提示           | 健康観察の結果や集計などをしながら、休みが続いている子どものことやクラスなど注意すべき留意点を説明している            |
|          |                     | 消毒する際の留意点として、自分自身や他の人に感染させないように工夫することが必要であると説明し、行っている意味をその場で説明した |
|          | 見学する視点を例示           | 特別支援学級への授業見学では、先生方がどのような配慮をしているのかを見てくように伝え計画的に実施していることを理解させた     |
|          | 実習の意味を伝える。          | トイレの見回りや補充を行う目的を示し、ただやるのではなく衛生状態を確認する大事な仕事であることを伝えていた            |
|          | 児童生徒との関わり           | 児童との関わりを多く持ってもらおうと思い、給食や清掃活動などは学級に入ってもらった                        |
| 将来に役立つ内容 | 一人職種ゆえの実習経験         | 将来養護教諭になった時、一人で健康診断をすすめるなければならないので、健康診断などを多く実習してもらった             |
|          | 保健指導の経験             | 将来、保健指導ができるよう、他教科の先生の授業を見させアドバイスをもらい、自分で考えた保健指導をHRで実施させた         |
| 次年度への活用  | インターンシップの実習を次年度に活かす | インターンシップの学生の記録をとっており、他市からきた養護教諭にもインターンシップの内容が分かるよう資料を残している       |

### 3. 実習生の養護教諭の職務理解

養護教諭の職務とは、養護教諭の専門的な役割や機能を指し、学校教育法第28条（中学校および高等学校での準用規定/第40条・第51条）に「児童（生徒）の養護をつかさどる」と示されており、児童・生徒の健康の保持増進に関するすべての活動と解釈されている<sup>6)</sup>。インターンシップを通して実習生が養護教諭の職務を理解したのかと尋ねたところ、【教員としての視点のシフト】【職務理解の深まり】【職務イメージの変化】【職務理解に関する困難さ】の4つのカテゴリーが抽出された。「（実習生は）生徒として運動会や健康診断などの表の部分を見ていたが、準備や片付けなど教員が動いている裏の部分を知り教師の視点で見ることができた」など、「教員の視点で養護教諭の仕事を見る」など実習生は児童生徒の立場で見ていた仕事を教員の立場で見ることができるようになり【教員としての視点のシフト】がなされていると理解されていた。「学生の記録に、現場じゃないと分からないとの記述があり、実際の現場で学ぶ意義を感じ取っていた」など〔教育現場で学ぶ価値〕、「治療動告書が間違いなく届くよう、名簿と照らし合わせる作業を学生と行なった。学生は、仕事をミスなく行うことへの重要性を理解していた」など〔仕事を行う上での配慮〕、「食物アレルギーを有する子供の保護者対応を見て、実際の教育現場での養護教諭の仕事は想像以上に責任が重いことを理解していた」など〔こどもの命を預かる職務の重要性〕などを実習で感じ【職務理解の深まり】があったと理解されていた。さらに「メンタル的に厳しい生徒に対して前に押し出す対応をするのを見て優しく受け入れるだけでなくサポートしている存在であることを理解していた」など〔優しく受け止めるだけの存在ではない〕ことや「記録、文書作成、統計処理など事務仕事も多くインター

ンシップの始めと終わりでは養護教諭の仕事のイメージが変わったと言われた」などの〔多忙な養護教諭〕の認識が強くなり養護教諭の【職務イメージの変化】があったと理解されていた。しかし、一方で、「学校の雰囲気は分かったと思うが、養護教諭の職務を理解するにはインターンシップの時間が足りない」など〔実習時間の短さ〕が指摘され、教職インターンシップでは【職務理解に関する困難さ】があると捉えられていた（表3）。

表3. 実習生の養護教諭の職務理解

| カテゴリー        | サブカテゴリー           | コード  |
|--------------|-------------------|--|
| 教員としての視点のシフト | 教員の視点で養護教諭の仕事を見る  | 生徒として運動会や健康診断など表の部分を見ていたが、準備や片付けなど教員が動いている裏の部分を知り、教師の視点で見ることができた   |
|              |                   | 学生にとって保健室は具合が悪い時にくるというイメージがあると思うが、実際にはそれ以外の対応が多いことを理解できたと思う  |
| 職務理解の深まり     | 教育現場で学ぶ価値         | 学生の記録に、現場じゃないと分からない事があったとの記述があり、実際の現場で学ぶ意義を感じ取っていた   |
|              | 仕事を行う上での配慮        | 治療報告書作成が間違いないように、名簿と照らし合わせる作業を学生と行った。学生は、仕事をミスなく行うことへの重要性を理解していた   |
|              | 子どもの命を預かる職務の重要性   | 食物アレルギーを有する子供の保護者対応を見て、実際の教育現場での養護教諭の仕事は想像以上に責任が重いことを理解していた。   |
| 職務イメージの変化    | 優しく受け止めるだけの存在ではない | メンタル的に厳しい生徒に対して前に押し出す対応をするのを見て、優しく受け入れるだけではなくサポートしている存在であることを理解していた  |
|              | 多忙な養護教諭           | 自分が子供の頃の保健室の先生に忙しいイメージはなかったが、インターンに来て養護教諭の仕事が多さに気づいたと言われた<br>記録、文書提出、統計処理など事務仕事が多く、インターンシップの始めと終わりでは養護教諭の仕事のイメージが変わったと言われた |
| 職務理解に関する困難さ  | 実習時間の短さ           | 学校の雰囲気は分かったと思うが、養護教諭の職務の役割を理解するにはインターンシップの時間が足りない<br>多くの健康診断を経験させたかったが、学生の授業の都合で経験できないことも多かったため養護教諭の職務を深く理解できたのかは分からない     |

#### 4. 実習生の良かった点

実習生の良かった点について、【インターンシップへの意欲】【児童生徒との良い関わり】【教職員との良い関わり】【補助的存在としての価値】の4つのカテゴリーが抽出された。「熱心にメモをとり質問する様子から養護教諭として生徒の役に立ちたいと言う思いが伝わった」など〔真面目で熱心、やる気がある〕様子や、「疑問に思っていたことをすぐに質問し養護教諭の動きを学ぼうとしていた」など〔養護教諭の動きを学ぶ〕様子や、「学生をミス指摘した後、気をつけますとすぐに謝り、その次には確実に仕事を行っていた」など〔素直で責任感がある〕様子、「嘔吐したりおもらしする子がいても、嫌な顔をせず片付けなどを手際よく手伝っていた」など〔一生懸命取り組む〕様子から【インターンシップへの意欲】があると捉えられていた。また、児童生徒への対応については、「積極的に児童と関わろうとする姿勢が良かった」、「いつも笑顔で優しく受け止めてくれそうな雰囲気があり子どももなついていた」など〔積極的な関わり〕があり【児童生徒との良い関わり】ができていたと評価されていた。「運動会の時に一緒に職員室で食事をとるなど教職員のなかに馴染んでいた。挨拶もきちんとできていた」など〔教職員の一員としての存在〕となっていたことや「(実習指導養護教諭の)仕事は忙しく指示できない時、仕事を与えてと言う変なオーラは出さず自分なりに仕事を見つけてやっていた、距離感が良かった」など学生は〔(実習指導)養護教諭との距離感〕も考えて負担となる対応がなかったなどから、【教職員との良い関わり】ができていたと捉えられていた。また、「病院に連れて行くほどのけがの対応をしている時に、学生に任せられた形になったが臨機応変に他の教員と共に動いてくれていた」、「仕事の手際がよく、健康診断結果の入力などの事務仕事は早くて正確であった」など〔職務の補助として頼れる存在〕であり、「健康診断の時に特に指示しなくても廊下で待機していた子供に検診についての説明や注意などを行っていた」など〔自主的な行動〕

も見られ【補助的存在としての価値】が高く、認められている様子が示された（表4）。

表4. 実習生の良かった点

| カテゴリー        | サブカテゴリー       | コード   |
|--------------|---------------|---|
| インターンシップへの意欲 | 真面目で熱心、やる気がある | 熱心にメモをとり質問する様子から養護教諭として生徒の役に立ちたいと言う思いが伝わった  |
|              | 養護教諭の動きを学ぶ    | 疑問に思っていたことをすぐに質問し養護教諭の動きを学ぼうとしていた   |
|              | 素直で責任感がある     | 学生のミスを指摘した際、気を付けますと素直に謝り、その次には確実に仕事を行っていた   |
|              | 一生懸命取り組む      | 嘔吐したりおもらしする子がいても、嫌な顔をせず、片付けなど手際よく行っていた  |
| 児童生徒との良い関わり  | 積極的に関わり       | 積極的に児童と関わろうとする姿勢がよかった<br>いつも笑顔で、優しく受け止めてくれそうな雰囲気があり子どももなついていた<br>特別な配慮が必要な生徒に対して、少ない情報でも適切な態度で接していた   |
|              | 教職員の一員としての存在  | 運動会の時に一緒に職員室で食事をとるなど教職員のなかに馴染んでいた。挨拶もきちんとできていた  |
|              | 養護教諭との距離感     | 仕事が忙しく指示できない時、仕事を与えてという変なオーラも出さず自分なりに仕事を見つけてやっていた。距離感が心地よかった  |
| 補助的存在としての価値  | 職務の補助として頼れる存在 | 病院に連れていく程のけがの対応をしている時に、学生に任せられた形になっが、臨機応変に他の教員と共に動いてくれた<br>保健室に入室する生徒の状況から熱中症の保健指導が必要だと考え、クラスに向き保健指導を行った  |
|              | 自主的な行動        | 仕事の手際がよく、健康診断結果の入力などの事務仕事は早くて正確であった<br>これをやった方がよいですか？と尋ねてくれ、消毒セットのバケツづくりや保健指導教材の作成など率先してやってくれた<br>健康診断の時、特に指示せずとも廊下で待機していた子どもにも検診についての説明や注意などを行っていた |

## 5. 実習生の課題

実習生の課題として、【実習生としての自覚不足】【インターンシップに向かう資質や能力】【学校保健に関する知識不足】【課題なし】の4つのカテゴリーが抽出された。「遅刻、欠席の連絡を学校に直接連絡せずに、一緒にインターンシップに来ている友人を通して伝えていた」など〔実習校への連絡不備〕や、「多忙で疲れていると思うが、眠そうに実習をしていた。ここにいる限りは先生だからと注意をした」など〔学校現場で実習しているという自覚のなさ〕から【実習生としての自覚不足】が課題としてあげられた。また「受け身ではなくこういうことを学びたいということを伝えてもらいたかった」など〔受け身の姿勢〕があったことや、「学生によって差があるが、毎回のインターンシップの報告書が書けない、あるいは遅れてしまう学生がいた」など〔実習記録を書くことへの困難性〕などが示され、【インターンシップに向かう資質や能力】に課題があったとの指摘があった。また、「主な執務内容、環境衛生検査の基準、健康診断などの基礎的知識が足りない。分かって実習した方が本人も楽だと思ふ」などの〔養護教諭の職務や学校保健に関する知識不足〕や「身体計測の際に、学生は子どもの名前も確認せずに測っていたので記録とずれてしまったことがあった」などの〔実践的な面での知識不足〕があり、【学校保健に関する知識不足】が課題であることが示された。その一方で、「学校のなかの雰囲気が分かって、今後、勉強しなければという意識に繋がれば出来なかったことも役に立つ」など〔(4年次で行う)養護実習ではないので課題と思わない〕など【課題なし】と捉えられている意見もあった（表5）。

表5. 実習生の課題

| カテゴリー             | サブカテゴリー              | コード  |
|-------------------|----------------------|--|
| 実習生としての自覚不足       | 実習校への連絡不備            | 遅刻、欠席の連絡を学校に直接連絡せずに、一緒にインターンシップに来ている友人を通して伝えていた  |
|                   | 学校現場で実習しているという自覚のなさ  | パソコンの作業を片足を抱えて行う、書類の扱いが雑など態度が悪かった。悪い人柄でなかったからこそ残念であった<br>多忙で疲れていると思うが、眠そうに実習をしていた。ここにきている限りは先生だからと注意した |
| インターンシップに向かう資質や能力 | 受け身の姿勢               | 受け身ではなく積極的にこういうことを学びたいということを伝えてほしかった   |
|                   | 実習記録を書くことへの困難性       | 見学実習だから仕方ないが、先を読んで動いてみて思った<br>学生によって差があるが、毎回のインターンシップの報告書を書けない、あるいは遅れてしまう学生がいた                         |
| 学校保健に関する知識不足      | 養護教諭の職務や学校保健に関する知識不足 | 主な執務内容、環境衛生検査の基準、健康診断などの基礎的知識が足りない。分かって実習した方が本人も楽だと思う  |
|                   | 実践的な面の知識不足           | 身体測定の際に、学生は子どもの名前を確認せずに測っていたので記録とずれてしまったことがあった   |
| 課題なし              | 課題だと感じたものはない         | 一度伝えるとそのまま自分で動くこともできていたので、実務面での課題はなかった   |
|                   | 養護実習ではないので課題と思わない    | 学校のなかの雰囲気分かって、今後、勉強しなければという意識に繋がれば出来なかったことも役に立つ  |

## 6. 大学への要望

大学への要望として、【大学と実習校との連携】【実習担当者の負担軽減】【実習時間の不足】【大学の事前指導の強化】【今後も続くことへの期待】の5つのカテゴリーが抽出された。「実習の日程や目的など担当者に伝わらないまま初日が始まった。日程調整をもっときちんとやってもらいたい」など〔実習先の担当者との連携〕の不備や、「実習の始まりは4月であるため3月ごろには実習生が来るのかどうかなどの連絡がほしい」など〔早い時期での日程調整〕、「運動会に一日来てもらい助かった。健康診断も学生にとって学ぶ意味があるので、都合をつけて来てもらいたい」など〔実習校が希望する日程調整〕、「健康診断のある時期に人数を多めにしてくてもらえると助かる」など〔実数校が希望する人数調整〕、「インターンシップが終わっても就学時健康診断なども手伝ってくれると助かる」など〔インターンシップ以外の連携〕が示され、実習校の要望を取り入れた【大学と実習校との連携】を図るべきであるとの要望が示されていた。さらに「実習記録に（実習指導養護教諭である）担当者のコメントを書く欄があるが、忙しい時期なので書きたくても書けない、簡便にしてもらいたい」など〔担当者のコメント欄が負担〕であり【実習担当者の負担軽減】が求められていた。また「行事に追われ、（実習生）学生は生徒と話す時間が少なかった。生徒ともっと関わらせてあげたかった」など〔児童生徒との関わりの不足〕があり【実習時間の不足】が指摘されていた。「遅刻、欠席の連絡を、実習校にしていなかった。大学で実習生としてのルールを指導してほしい」など〔実習生としてのマナー〕や「実習の記録をきちんと書けない学生がいる。学力的に厳しい学生に対してどのように接すれば良いのか分からなかった」など〔実習記録の指導強化〕、「養護教諭や学校保健に関する知識が乏しい。養護教諭の仕事の基本や学校保健法などの法律を学んでほしい」など〔学校保健に関する知識を高める〕などの【大学の事前指導の強化】が求められていた。これらの実習校から大学側への要望は、実習が終了してから指摘されたことであり、実習途中で修正できなかったことも要望として強くあげられた要因であった。その上で「養護教諭になりたくて来ているため、心構えが前向きで教わろうとする意識が高いところが良い」など〔学生の心構え〕が良いこと、「実習生がいたおかげで健康診断もスムーズに行え、とても助かった」など〔補助的役割〕として認められていたこと、「自分も看護出身で学校経験がなく養護教諭になったため、学生にとってインターンシップ制度は本当に良いと思う」など〔自分の経験から思うこと〕により一人職種の養護教諭にとってインターンシップは役立つことから【今後も続くことへの期待】が挙げられていた（表6）。

表6. 大学への要望

| カテゴリー       | サブカテゴリー        | コード  |
|-------------|----------------|--|
| 大学と実習校との連携  | 実習先の担当者との連携    | 実習の日程や目的など担当者に伝わらないまま初日が始まった。日程調整をもっときちんとしてもらいたい   |
|             | 早い時期での連絡調整     | 実習の始まりは4月であるため、3ごろには実習生がくるのかどうかなどの連絡がほしい   |
|             | 実習校が希望する日程調整   | 運動会に一日来てもらい助かった。健康診断も学生にとって学ぶ意味があるので、都合をつけて来てもらいたい   |
|             | 実習校が希望する人数調整   | 健康診断のある時期に、人数を多めにきてもらえると助かる<br>異動してきたばかりで2名の実習生をもつのは厳しかった。時期をずらすか1名にしたい                              |
|             | インターンシップ以外の連携  | 実習が終わっても、就学時健康診断なども手伝ってくると助かる  |
|             | 実習担当者の負担軽減     | 担当者のコメント欄が負担<br>実習記録に担当者のコメントを書く欄があるが、忙しい時期なので書きたくても書けない。簡便にしたい                                      |
| 大学の事前指導の強化  | 実習時間の不足        | 行事に追われ、学生は実際に生徒と話す時間が少なかった。生徒ともっと関わらせてあげたかった   |
|             | 実習生としてのマナー     | 遅刻、欠席の連絡を、直接、実習先にしていなかった。大学で実習生としてのルールを指導してほしい   |
|             | 実習記録の書き方の指導強化  | 実習の記録をきちんと書けない学生がいる。学力的に厳しい学生に対して、どうすれば良いのか悩んでしまった   |
| 今後も続くことへの期待 | 学校保健に関する知識を高める | 養護教諭や学校保健に関する知識が乏しい。養護教諭の仕事の基本や学校保健法などの法律を学んでほしい   |
|             | 学生の心構え         | 養護教諭になりたくて来ているため、心構えが前向きで教わろうとする意識が高いところが良い<br>保健師実習のように養護教諭がお膳立てして指導する必要がなく、手伝ってもらう感覚のためとても助かる      |
|             | 補助的役割          | 実習生がいたおかげで健康診断もスムーズに行え、とても助かった<br>自分の経験から思うこと<br>自分も看護出身で学校経験がなく養護教諭になったため、学生にとってインターンシップ制度は本当に良いと思う |

### Ⅲ. 考察

学校インターンシップは、学生の実践的指導力をつける上で有効であるとされている。学校インターンシップが開始された背景には、学校現場で即戦力となりうる教員が望ましいとの教員採用側の意識、学生が早期に自らの教員としての適正を見極めることへの有用性、さらには教師が多忙であり手伝う人員が必要であることなどが考えられている。本研究では、教職インターンシップの実習指導を行なった実習指導養護教諭にインタビュー調査を行い、すべての実習指導養護教諭から教職インターンシップは有用であるとの評価が得られ、教職インターンシップの受け入れは概ね良好であったことが示された。小・中・高等学校教諭を目指す学生を対象に実施した学校インターンシップに関する教員の意識に関する研究<sup>7)</sup>では、学校インターンシップの実習生について、教育実習生とは異なり教えて指導する相手ではなく、長期間にわたる活動のため一緒に教育活動を行うスタッフであるという捉え方をしていた。本研究においても養護教諭は一人職種であるため健康診断の忙しい時期に実習生が補助的な業務を担ってくれることは助かるとの意識から補助スタッフとして受け入れられていたことが推察された。しかし、インタビュー調査から実習指導養護教諭は実習生を単にスタッフとして捉えているのではなく、実習生に養護教諭の実践的能力を育てたいとの意識を高く持っていることが窺われた。それは指導の工夫として、実習生の受け入れの準備を十分に行うことや、実習生が主体的に考えられる関わり方を心がけ、実施の際には一つ一つの養護活動の意味を丁寧に説明するなど細やかな指導にも現れていた。このことは、養護教諭は基本的には一人職種であり、初任期に同職種から実践の場で指導を受けることや、同職種の他者評価を受ける機会が乏しいなど<sup>8)</sup>の職務の特殊性があることから、学校インターンシップでより多くの実務を経験させ、卒業直後でも自立して養護教諭の職務が果たせるようにさせたいとの意識によるものだと考えられた。

養護教諭の職務理解については、多くの実習指導養護教諭から学生は実習中に養護教諭の仕事を見る視点を自分が中学生、高校生であった時の生徒目線から教師目線へとシフトしていたと述べられていた。こ

これは、実習指導養護教諭が健康診断の実習を準備から事後措置まで一連の流れがわかるように実施したことにより、実習生は自分が生徒の立場では分からなかった実務内容を理解し、養護教諭としての視点で見ることができるようになったと考えられた。また、実習指導養護教諭が保護者への対応を見学させることによって、子どもの命を預かる職務の重要性や、児童生徒への健康相談活動を見学させることで実習生が養護教諭に対して優しく受けとめるだけでなくサポートしている存在へと意識を変えさせていたことも示された。これらは、実習指導養護教諭が学校における養護教諭の役割を意識して伝えたことにより、実習生は実際に行っている養護教諭の職務を理解することができたと考えられる。

実習生の良い点については、児童生徒、教職員との良い関わりが多く見られ意欲的にインターンシップに参加していると捉えられていた。先行研究<sup>8)</sup>においても、教育実習など免許状を取得するための実習に比べインターンシップでは、自主的に参加する実習なのでやる気が見られ、かつ、長期間の実習なので児童生徒や教職員とも上手くコミュニケーションが図れているとの報告があり、本研究においても同じ傾向が見られた。一方で、改善してもらいたい点については、実習態度についての不備や、学校保健や法律についての知識不足など大学側の事前指導の不足により実習生に不利益があったと捉えられていた。実習の際の怠惰的態度や知識不足については、インターンシップが2年次の4月から実施されることもあり学生自身の教員であるとの意識の低さや、大学側が学生の学校保健に関する知識の理解度を確認しないまま実習に臨ませてしまったことが要因にあることが考えられた。このことからインターンシップを実施する大学側の課題が大きいことも示された。

大学側へ対する課題や要望として、大学側と実習校の連携が上手く図れておらず大変困惑したとのことや、大学での学生への事前指導を強化してもらいたいことが挙げられていた。実習学生の決定や実習時期などについては分かり次第早急に連絡すること、実習日については実習校の要望も取り入れる必要があることが示された。教職インターンシップは、養護実習とは異なり学生に対する指導や評価は行わないことから、実習生の礼儀作法、実習記録の書き方、実習内容の基本的知識などは大学側が事前に指導し、実習校に負担とならないことが必要最低限であることも挙げられた。また、実習指導養護教諭から実習記録のコメント欄が負担であるとの意見があったため、早急に対応する必要があることも示された。本研究では教職インターンシップで大学教員が実習校に出向くのは、実習の事前事後の2回であり時中指導がなかったため、実際に実習指導養護教諭から指導の困難さを伺う機会がなかった。今後は、事前指導の強化と共にインターンシップ実習の行っている期間中にも大学教員が実習校に出向き、実習指導養護教諭の要望や困難と感じていることを確認しながらインターンシップの実習を進めていく必要がある。

#### IV. 結論

教職インターンシップの課題を、実際に実習生を受けもった現職養護教諭の意識から明らかにした。多くの実習指導養護教諭が、養成時期の早い段階で多くのことを教育現場で経験する教職インターンシップの意義について理解を示し、今後もこの制度が続くことを望んでいた。そして実習指導養護教諭は、実習生が将来において、養護教諭としての職務遂行に役立つよう指導内容や指導方法を工夫していた。実習生に対しては、インターンシップに意欲的に参加し、学校における養護教諭の職務を理解した様子が見られていたとの評価がなされていた。しかし、学生の実習態度や大学側の指導の不備などの課題も指摘されていた。そのため実習指導者である現職養護教諭と大学教員が情報を共有し、連携を深めることが学校インターンシップを行う上で重要であることが明らかとなった。今後は、これらの課題を解決できるよう大学

側は、実習指導養護教諭、教職員、教育委員会の方々と連携を図る必要があることが示された。

## Ⅶ. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、研究協力者がA市で教職インターンシップを受け持った実習指導養護教諭15名と限定されていることがある。そのため本研究で得られた結果を一般化することは難しい。しかし、養護教諭養成大学において養護教諭免許状を取得するための養護実習における成果を示している研究は多い<sup>8-10</sup>が、より早い段階から学校現場で体験活動する学校インターンシップでの成果を示している研究は多くはない。そのため学校インターンシップの課題を明らかにできたことは意義がある。今後は、養護教諭養成課程において学校インターンシップが養護実践力の育成にどのように貢献しているものであるのかを明らかにする必要がある。そのためには、他の多くの養護教諭養成大学とも協働し実際に学校インターンシップ実習を経験した学生が、卒業後、養護教諭として務めた際に学校インターンシップでの学びをその後の職務にどのように活かしているのかを検証する必要がある。

## 謝辞

調査にご協力いただいた教職インターンシップ実習指導者である現職養護教諭の皆様、協力校の管理職はじめ教職員の皆様、教職インターンシップに参加した本学学生の皆様に心より感謝申し上げます。

## 利益相反

利益相反に相当する事項はない

## 引用文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会審議会答申：これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）、文部科学省ホームページ、[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyuo/chukyuo0/toushin/1365665.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyuo/chukyuo0/toushin/1365665.htm)（2021.10.01 21:00アクセス）
- 2) 佐久間浩美（2015）看護系4年生大学における養護教諭養成の課題～A大学の現状から～、千葉県学校保健学会年次大会講演集、54-55.
- 3) 了徳寺大学教職課程委員会（2021）、教職インターンシップガイドブック令和3年度版、了徳寺大学教職課程委員会、1-15.
- 4) 佐久間浩美、藤原昌太、池谷壽夫（2018）看護を基盤とした養護教諭養成機関における養護実践力育成の検討～教職インターンシップの取り組みの成果と課題～、了徳寺大学研究紀要、12、163-171.
- 5) 藤原昌太、佐久間浩美、池谷壽夫ほか（2019）学校インターンシップにおける課題の検討－実習校における管理職の意識調査より－、了徳寺大学研究紀要、13、7-14.
- 6) 日本養護教諭教育学会（2019）養護教諭の専門領域に関する用語の解説集第三版、日本養護教諭教育学会、愛知、14.
- 7) 原清治、芦原典子（2019）学校インターンシップは教育実習の機能をどこまで代替できるか、佛教大学教育学部論集、30、1-15.
- 8) 石井康子、泊祐子、西田倫子（2010）養護実習における養護教諭の指導の現場と教育上の課題、岐阜

県立看護大学紀要, 10(2), 3-9.

- 9) 高田恵美子, 治部哲也 (2016) 養護教諭の経験年齢からみた養護実習の現場と課題, 関西女子短期大学紀要, 26, 1-16.
- 10) 石原昌江, 野村梨香 (2001) 岡山大学における養護実習の現場と課題, 岡山大学教育実践総合センター紀要, 1, 89-96.

2021年12月21日 受理  
了徳寺大学研究紀要 第16号